

審査の結果の要旨

氏名 堀越耀介

本論文は、「子どもとする哲学」(Philosophy for Children、以下、P4C)を対象として、創始者としてのリップマン、その思想的源流としてのデューイの思想、その批判的応答者としてのビースタやヴァンシールガムらの議論を検討し、シティズンシップ教育やデモクラシーとの接続可能性を明らかにしようとするものである。

第1章では、P4Cの目的を批判的思考の涵養や民主的徳の習得、すなわちシティズンシップ教育の一環とみなすデューイ、リップマンらと、それを批判し、他者からの呼びかけを内包する自由で目的のない活動としてのP4Cを擁護するビースタ、ヴァンシールガムらとの対立点が検討される。そのうえで、後者で想定されるビースタによる「主体-性」の概念が、P4Cにおいては「薄い主体-性」として捉えられるべきであることが提起される。

第2章では、P4Cにおける教師の役割と権威性について検討される。とりわけ、ある程度の哲学的な素養と探究の手続きを内在化した教師が、P4Cにおいては哲学的な議論の方向性を保つことによって権威主義へと滑り落ちていくという問題が検討される。教師の役割を可能な限り薄めることで、よりフラットな関係性と他者の現前を志向するヴァンシールガムらの理論もふまえつつ、あわせて、“p4c Hawaii”の「コミュニティ・ボール」の使用が取り上げられる。そこでは、教師の権威性は、解消されるのではなく、薄められ、分散されることによって、権威の解消でも強化でもない第三の道が示される。

第3章では、林竹二の理論と実践の独自性が、「P4C的な実践」の先駆者として位置づけられ、検討される。林の実践におけるソクラテス的な探究の手法や、吟味、批判、浄化といった視点に加えて、「呼びかけ」の手法の独自性が注目され、ビースタのいう「呼びかけ」による主体形成の議論と重なる点が指摘される。

第4章では、P4Cとシティズンシップ教育の関係が、扱われる。P4Cにおいて涵養される、リップマンが提起した「理性的であること」という市民性が、クリックらのいう市民的共和主義や政治リテラシーの習得とは別の意味で、ミニマムなシティズンシップの構想であり、そこで前提とされている民主的な諸価値をも問い直し、作り直していくことができるという意味で、「民主的な教育」として正当化可能であることが示される。

第5章では、P4Cにおける「探究のコミュニティ」論の背景にあるデューイの思想に遡り、「公衆」や「コミュニティ」といった概念が検討される。そこには、公衆によって維持される「認識的デモクラシー」としての側面が見いだされ、P4Cにおける探究のコミュニティがそうした「公衆」の構想と重なり合う可能性が示される。

補論では、第5章において議論したデューイのデモクラシーの構想が、アートと美的経験という観点からアプローチ可能であることが検討され、そこには、P4C実践に、美的経験・アートを積極的に組み込んでいく可能性が包含されていることが示される。

P4Cの実践と研究は哲学研究において近年非常に活発であるが、学校教育にそれを導入することを教育学から検討したものは少ない。加えて、それをシティズンシップ教育や民主主義論の観点から掘り下げたという点で本論文の学術的意義は大きいという点で審査員の評価は一致した。以上により、本論文は博士(教育学)の学位を授与するにふさわしいものと判断された。